

山元亀次郎関係資料

福家崇洋

目次

- 一 山元亀次郎略歴
- 二 資料解題
 - ①新聞スクラップ帳
 - 全国学生同盟会ビラ
 - ②選挙広報紙
 - 一九四〇年の選挙広報紙
 - 一九四二年の選挙広報紙
 - ③写真

一 山元亀次郎略歴

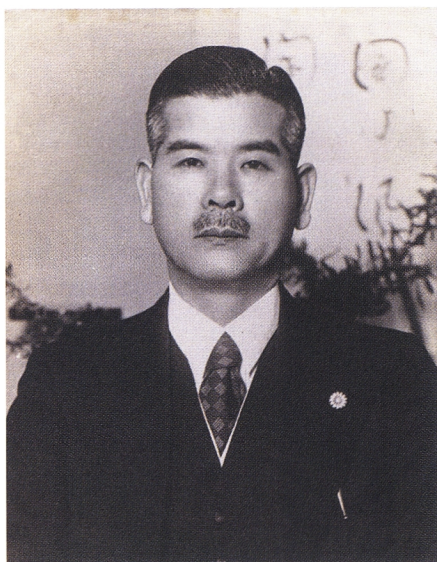
山元亀次郎は一八九四年五月一二日、鹿児島県大島郡瀬戸内町西古見に生れた。父十太郎は鰹漁業網元の先駆であった。一九〇九年に大島郡古仁屋高等小学校を修了した後、熊本、長崎で船員になって学資を稼ぐ。のち大阪市の桃山学校（現在の桃山学院中学校・高等学校）に通い、一九一五年に卒業した。

山元は一九一五年から二年の兵役を経て、日本大学法科専門部に入學する（一九一八年中退）。この間、模擬国会で総理を務めるなど政治への関心を深め、一九一九年四月に全国学生同盟会（機関誌『革新運動』）を、同年一月に日本労働党を、一九二二年一月に对外青年革新協会などを結成して学生運動や普通選挙運動に奔走した。

普通選挙法施行後初めての第一六回総選挙（一九二八年）に、鹿児島県第三区から労働農民党公認で出馬したが落選した。第一七回総選挙（一九三〇年二月）、第一八回総選挙（一九三二年二月）も同じ鹿児島県第三区から社会民衆党公認で出馬したが、落選に終わった。

満洲事変（一九三一年九月）を機に、社会民衆党内で国家社会主義派が台頭する。同派の赤松克麿らが社会民衆党から脱党するとき、山元も赤松と行動を共にした。赤松ら是一九三二年五月に日本国家社会党を結成し、山元は同党の中央執行委員に就任する。

一九四〇年二月の鹿児島県第三区補欠選挙では、立憲民



山元亀次郎

政党公認候補をやぶつて念願の初当選を果し、第一議員倶楽部に所属した。⁸選挙出馬の際、秋山定輔が後援しているように、これ以前から秋山を中心とする山水会に属するなど彼のもとで活動していた。⁹

その後、聖戦貫徹連盟の結成準備、新体制研究会、新体制促進同志会に加わり、¹⁰新体制に向けた準備に積極的に取り組んだ。ただ、一九四〇年八月、新体制促進同志会の即時解散緊急動議を提出したために除名される。一九四一年七月には衆議院議員選挙法違反で起訴され、一度は無罪になるが大審院で敗訴となり代議士の資格を失った。¹¹失地回復のため、一九四二年四月の翼賛選挙に出馬するが落選した。¹²

戦後の第二五回総選挙（一九五二年）では、東京第二区から日本社会党左派公認で立候補するが落選。¹³一九五四年の奄美補欠選挙にも無所属で立候補するが落選した。¹⁴その後、政治運動を断念し、地元の西古見で南進興業を設立して、マンガン採掘を行った。山元はガンジーを尊敬しており、¹⁵古仁屋の宿で五度目の断食苦行で高血圧を誘発し、一九六二年三月二七日にその生涯を閉じた。

山元の単著には、現在『新日本の活路と原動力』（一九二六年七月二五日、六版、民衆社）が確認されている。¹⁶同著は同年七月二〇日に発行され、二一日に再版、二二日に第三版、二三日に第四版、二四日に第五版と一日ごとに版を重ねた。これを額面どおりに受取れば大ベストセラーになるが、現在入手が極めて難しいことから実際の発行部数は少なかつたのではないか。現在、鹿児島県立図書館のみ所蔵である。巻末に全国学生同盟会や日本労働党に関する論説・新聞記事などが掲載されており、これらは後述する新聞スクラップ帳から採られたと考えられる。

山元本人に焦点をあてた研究はいまだない。これは資料の不足や彼が行動の人であつたため、今日から彼の軌跡や思想を追いかけることが難しいためである。また普選運動、無産政党から日本国家社会党、新体制運動へと展開していく彼のような人物の軌跡をトータルで把握できる分析視覚がいまだ充分ではないこともある。いずれにしても、今後さまざまな資料を渉猟しつつ、山元の軌跡をさらに跡付けていく必要があると思われる。本資料紹介がその一助となれば幸いである。

山元亀次郎関係資料目録

番号	項目	年月日	発行者(送信者)	宛先	備考
1	〔新聞スクラップ帳〕				
2	〔新聞断片〕				
3	〔新聞断片〕				
4	〔新聞断片〕				
5	『読売新聞』切り抜き「思い出のアルバム、帰朝待つ大山郁夫氏邸から奇しき発見」				
6	『奄美』	1962年4月11日			山元の訃報が掲載。
7-①	〔山元亀次郎学歴及び兵歴及び政治経過〕				山元自筆ではない(石川麗子氏談)。No.7は大岡義昭宛封筒に一括。
7-②	書簡	4月10日	山本英輔	山元亀次郎	No.13の中味と思われる。
8	書簡〔申し出辞退につき〕	1937年12月14日	尾野実信	山元亀次郎	封筒あり。
9	書簡〔来信への返礼〕	1954年7月11日	日本労働組合総評議会高野実	山元亀次郎	封筒あり。
10	葉書〔民主社会党中央執行委員長及び書記長就任につき〕	1960年2月18日	民主社会党執行委員長西尾末広、民主社会党書記長宮柳益	山元亀次郎	
11	書簡〔氏名及び略歴調査につき〕		衆議院議事部資料課松本圭右	山元亀次郎	
12	封筒		久原房之助	伊藤文吉	
13	封筒	1936年4月10日	山本英輔	山元亀次郎	
14	書簡〔第14回大岡祭(墓前祭)舉行につき〕		大岡奉賛会々長松木一策	大岡義昭	
15	衆議院議員当選証書	1940年2月17日	鹿児島県知事藤野直		
16	衆議院前議員記章帯用証				
17	パスポート	1936年5月14日	大日本帝国外務大臣從三位勲一等松岡洋右		
18	奄美大島諸家系譜集				
19	〔金銭出納メモ書き〕				
20	集合写真				
21	写真〔尾崎行雄を囲んで〕				
22	山元亀次郎肖像写真				
23	写真〔尾崎行雄〕				
24	写真〔山元代議士送別会〕	1938年12月6日			
25	写真〔山元亀次郎氏代議士当選記念〕	1940年3月13日			
26	写真〔山元亀次郎中国旅行歓迎会〕				
27	写真〔奄美会〕				
28	写真〔鈴木茂三郎と〕	1957年4月23日			
29	写真〔故児玉先生墓石建立〕				
30	写真〔石橋首相歓迎会〕	1957年1月16日			
31	写真〔赤松克廣追悼会〕				
32	写真〔奄美会カ 昇曙夢らと〕				
33	家族写真				
34	写真〔奄美寛発会式、平野力三〕				
35	写真〔戦闘服を着て〕				
36	写真〔上村恩師宴会〕				
37	写真〔北一輝の会〕				
38	写真〔宮崎口葬式〕				
39	写真〔秋山定輔遺影を囲んで〕				
40	写真〔尾崎行雄を囲んで〕				
41	写真〔小池四郎、陶山篤太郎追悼会〕				
42	写真〔若かりし頃の山元〕				
43	写真〔桃山中学同窓会〕				
44	写真〔マンガン炭鉱にて〕				
45	写真〔西古見会〕				
46	写真〔西古見会〕				
47	写真〔西古見会〕				
48	山元亀次郎肖像写真				
49	家族写真				
50	写真				
51	写真〔再軍備反対平和大会〕				
52	写真				
53	写真				
54	写真				
55	写真〔山川均を囲んで〕				

二 資料解題

山元亀次郎の關係資料（以下山元亀次郎關係資料と称す）は、山元亀次郎のご令嬢石川麗子氏のもとに、黒皮のボストンバックに入った状態で残されていた。戦前における山元の略歴から、社会運動・政治運動に関する資料も数多くあったと思われるが、ほとんど残されていない。同資料の目録は、右表のようになっている（以下資料目録と略記す）。本稿で取りあげるのは、このうち政治運動・社会運動関係のみである。これらを分類すれば、①新聞スクラップ帳、②選舉広報紙、③写真となる。以下で貴重だと思われる資料を掲載していきたい。

①新聞スクラップ帳

新聞スクラップ帳は、山元が一九一〇年代から都市新聞、地方新聞の記事を切り抜き、貼り付けたものである。新聞記事には一部朱が入ったり切り抜かれたりして、決して見やすくはないが、当時の雰囲気を与えている。新聞スクラップ帳には、山元の自筆で「吾輩の総理大臣振を此の記事に依つて想像すべしだ 日本大学在学中」と記されており、当時の山元青年の意気軒昂とした姿を語ってあまりある。このなかには新聞に連載された尾崎行雄、米田庄太郎、大石正巳らの論説などが貼られており、山元青年の思想形成を見るうえでも興味深い。またスクラップ帳で注目されるのは、全国学生同盟会及び日本労働党に関する新聞の切抜き、ビラである。

「大正デモクラシー」を彩る史実として有名なのが、一九一八年一月の南明倶楽部で行われた吉野作造と浪人会の立会演説会である。ただ、浪人会がこの翌月にも立会演説会を行っていたことはあまり知られていない。このとき壇上で浪人会に批判を加えたのが全国学生同盟会である。当時、東京帝国大学では新人会が、早稲田大学では建設者同盟など学生運動団体が結成されつつあった。また全国学生同盟会もそのひとつで、主に都下私立大学の学生から構成されていた。この中心にいたのが山元である。このスクラップ帳には、浪人会との演説会の頃に配布されたと思われるビラが挟

まれていたもので、山元の若かりし姿が写った写真とともに、ここに掲載したい。

〔全国学生同盟会ピラ〕〔資料目録』No.1に綴じ込み〕

宣言

光輝三千年來金甌無欠ナル我ガ国国体ノ尊嚴ハ内外人共ニ等シク之ヲ敬慕スル所ナリ国礎ノ盛シナル其ノ極ル所ナシトハ皇祖皇宗ノ遺訓ナラズヤ 然ルニ近者国体擁護ノ声ヲ聞ク怪奇ニ堪ザル次第ナリ我ガ国体ハ万々民共ニ尊重スベキモノニシテ永久永劫国民ノ自ラ起ツテ擁護セザル可カラザル程危殆ニ瀕スル性質ヲ有スルモノニ非ザルナリ何事ゾ 茲ニ浪人会ナルモノアリ駄弁ヲ弄シテ国体擁護ノ声ヲ揚ントハソノ僭越ナル寔ニ言語ニ絶ス 吾人ハ国体ニ有害ナル思想ハ絶対ニ之ヲ排スサレド如何ナル思想入り来ルモ寸毫ノ微ト雖モ我ガ国体「数字分確認できず」事ナキハ吾人ノ確信スルトコロ也

然ルニ陋習ニ捕ハレタル一部人士ノ世界大勢ノ赴ク所ヲ知ラズ世界思想ノ潮流ヲモ知ラズシテ徒ニ新思想ノ直ニ以テ国体ヲ滅ストノ浅見ヲ陋劣ニモ發表シテ 恥トセザルハ之レ寧ロ国民ノ恥辱ト曰ハザル可カラズ剩ヘ暴力ヲ背景トシタル談議ニ依リテ私言ヲ逞シクセントスル實ニ戦国時代ニサヘアルマジキ現象タリ茲ニ於テ吾ガ全国学生同盟会ハ憤然トシテ起チ世ノ惡徒物ノ蒙ヲ啓キ一面學說ノ權威ヲ表現シ他面思想界與論ノ奈ノ辺ニアルカヲ明カニセント欲ス敢テ滿天下ニ宣言ス

大正七年拾貳月

全国学生同盟会

東京 神田錦町一ノ一四

電話 神田二五二七番



『資料目録』No.42。4 列矢印先が山元。なお掲載にあたり見易さを考慮して写真の縮尺を変更した（以下同様）。

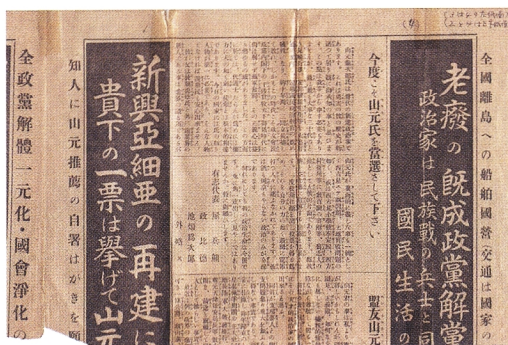
② 選挙広報紙

関係資料には、選挙広報紙が二種類残されている。ひとつは、山元が一九四〇年二月の補欠選挙に立候補する際に配布したもの、もうひとつは彼が一九四二年の翼賛選挙に立候補する際に配布したものである。いずれの広報紙にも投票者への挨拶や政見、推薦文などが掲載され、地元の大島郡で配布されたと考えられる。選挙期間中の山元の動静は今後地方新聞などで確認する必要があるが、選挙広報紙には当時の山元の主張や彼の政治的後援者の推薦文が掲載されて貴重である。資料の性質上今日ではほとんど残されていないとも考えられるので、重要と思われる主張などを以下に掲載していきたい。

②― 一九四〇年の選挙広報紙『資料目録』No.2)

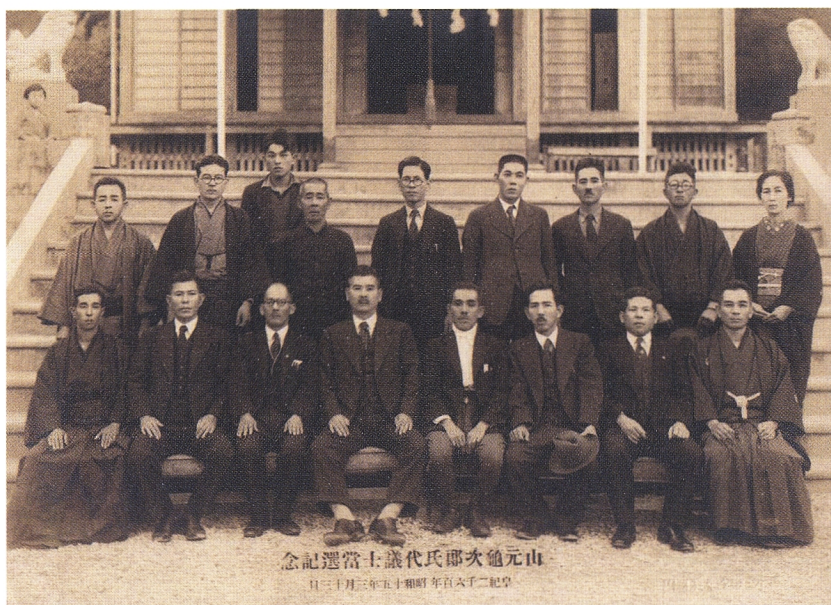
発行日、発行場所は明記されていない。広報紙の端に「責任者 大島郡名瀬町 政比徳」とあるので、現地で発行されたと考えられる。もともとは一枚だったが、破損して数枚に分離している。上掲の写真のように、「老廢の既成政党政党挙国党へ／政治家は民族戦の兵士と同じく／国民生活の兵士となり」「新興亜細亜の再建に当れ／貴下の一票は挙げて山元亀次郎へ!!」と左右に大書された。なお、立候補推薦人は、秋山定輔、秋田清²⁹⁾、松岡洋右、田中国重³⁰⁾、小森雄介³¹⁾、大川周明である。

この選挙広報紙には「山元亀次郎中国旅行歓迎会」で撮られた写真が使われた。ここには秋山定輔門下の人々が集まっており、佐々井一晁³²⁾、宮崎龍介³³⁾、実川時治郎³⁴⁾、中溝多摩吉³⁵⁾など今日では容姿を確認することが難しい人物も写っているの以下に掲載した。また当時の山元の政見〔記事一〕、大島での山元の活動が記された推薦文〔記事二〕、当時の山元の政治的背景を書いた赤松克麿の推薦文〔記事三〕もそれぞれ以下に掲載した。





『資料目録』No.26。中国旅行歓迎会にて。撮影時期は 1938 年末か。写真裏に「山元亀次郎中国旅行歓迎会／三水楼／右／西岡竹二郎／亀井貫一郎〔社会大衆党〕／実川時次郎〔時治郎、大亜細亜通信社社長〕／中溝多摩吉〔防共護国団を結成〕／秋山定輔〔『二六新報』元社長〕／山元亀次郎／津崎尚武〔衆議院議員〕／佐々井一晁〔日本革新党総務委員〕／秋田清〔『二六新報』元社長で、衆議院議員に当選、この頃第一議員倶楽部に所属後厚相、拓相を歴任〕／宮崎龍介〔父は宮崎滔天、無産運動に関係後、東方会に所属〕」とある。秋山を中心とする山水会の集まりで 1940 年の選挙広報紙にこの写真が使われた。近衛文麿の側近である秋山定輔のもと、山元はここに写った人々と新体制推進運動に携わった〔後掲の記事 3 参照〕。山水会の写真は『秋山定輔伝』第 3 巻巻頭にも 2 枚掲載され、いずれにも山元が写っている。



『資料目録』No.25。前列左から 4 人目が山元。無事当選した記念として 1940 年 3 月 13 日に撮影したもの。

〔記事 一〕

○私の重要な政見

衆議院議員候補者 山元亀次郎

一、全政党建党国民的強力政党的創建

◎国難突破の政治的最高手段です。

二、国防の徹底的充実

◎世界的民族戦時代には国家を救ふは唯国防の徹底充実あるのみ。

三、重要金融、産業の国営化

◎自由主義個人主義の現機構では真の国防と国民生活は安定確立しない。戦争成金絶滅は急である。

四、全国離島への船舶国営

◎下関釜山、青森函館連絡船舶の如く鉄道延長主義に依る船舶国営、大阪商船、日本郵船会社等の暴利独専の打破

鉄道郵便の如し。

五、軍需と平和両産業の調制物資需給の確立

◎国家の爲めである以上犠牲も均等されるのが当然である。物資不足は銃後を不安にする。

六、物価騰貴、大衆増税反対、暴利税の創制

◎民衆富んで国防もある銃後の健全が国防の健全にて両者不可分です。

七、国民大衆の生活権確立

◎甲が乙の万人分も富を専有し乙が国民の九割ならば真の民族戦の最後の勝利は出来ない。

八、兵士及びその遺族に対する特殊保護法の制定

◎国家の犠牲者に対して当然です。

九、財閥、学閥、官僚閥の弊害打破

◎国家はこれ等諸閥の専有物ではありません。官僚の武器たる法律万能の打破人才の登用、ヒットラーやムツソリーニは博士でも学士でも富豪でもない。非常時には非常時の人物を要す。

十、大亜細亜主義の実現と新興国家群と軍事同盟の締結

〔記事 二〕

○今度こそ山元氏を当選さして下さい

山元亀次郎氏は当代の新進政治家であります。これは過去の彼の歴史が物語つて居り既に御承知の事と思ひます。この点是我等から申す必要もありませんが、彼は最も大事な三十代のとき尾崎行雄、安部磯雄先生等を大島肝属に案内し、選挙区民政治教育の爲め犠牲になり、約十年間に三回立候補して敗れ、しかもこの時代こそ政友会民政党内閣下の干渉買収天下御免時代に尚ほ屈せず孤軍奮闘、その正義心は益々燃ゆるの感がありました。この方面に於ては、代議士たらんが爲めには権力に犬の如く弱い徒輩とは根本的相違であります。今日の国家には氏の如き人物が第一に必要であり、そんな人物でなければ選挙民も安心出来ません。

彼が父は故朝虎松氏と共に漁業界の恩人である事は業界の識る所であるが山元氏が裏面的に尽した事も一例として西古見エサ綱問題、土地買収問題の如く、或は西古見小学校奉安殿、西方村役所等に数百円の寄付等、貧乏人の彼として人情的片面であります。郡救済を空念仏に宣伝する徒輩とは異ひます。一度役所に顔を出し投票を得る爲め、それを自分の力の如く新聞に電報打つ人々に迷ふなかれであります。彼は酒も煙草もやらない政治のみが全部であります。

何れにしても彼の政治生命は今後です。兎に角一度出して見やうではありませんか。特に御願ひします。

有志代表 屋兵熊

政比徳

池畑爲次郎

外略ス

〔記事 三〕

○盟友山元亀次郎君の側面を語る

衆議院議員 赤松克麿

山元君の事は私より寧ろ選挙民の方が詳しいかもしれないが同君の偉大なる識見、正義感、如何なる権力にも、金力にも屈しない犠牲的情熱には私も常に陰ながら尊敬して居る一人である。

同君の表に現れて居る既にその天才的政治家の側面を語る事が出来ると思ふ。

同君が支那人との関係深い事は日支問題愈々重大を加ふる秋、我等の見逃し得ない事実である。満洲支那方面を常に往復し昨年帰京のときは支那の巨星呉佩孚周囲の正大社同人〔一〕呉佩孚参謀総長陸軍大将蔣雁行、陳元四川省長〔二〕程元天津保安局長等数十名が送別会を開き、前途を祝福して居るが如き支那人として稀らしい事実である。

最近は例の政界の爆弾宣言とも云ふ可き一条〔実考〕公爵、頭山満、山本海軍大将連名の挙国一党宣言の黒幕となり、或は秋山定輔先生等と近衛公擁立の政党運動等、新聞に現れて居るだけでも世人の識る通りである。

昭和十三年十月十二日東京都新聞には曰く「近衛首相は十日午後六時より虎の門の霞山会館に於て広い意味の近衛家族会議を開催して晚餐を共にしたが、（中略）〔省略は原文のママ、以下同様〕この近衛一族晚餐会に列席した顔触れを見ると相当異色ある人物が網羅されて居る。即ち首相を始め木戸厚相、松岡洋右、秋山定輔、麻生久、亀井貫一郎、池田純久大佐、宮崎龍介、山元亀次郎、佐々井一晁の諸君それに異色あるところでは去る七十三議會開会中政党本部占拠

事件を捲起した中心人物中溝多摩吉君も参加、たゞ同会合に案内を受けて居た久原房之助中野正剛の両氏は差支えがあつて出席しなかつたが。以下略

昭和十四年二月十日読売新聞には、時代が生んだ全体主義政党、無産党影を没す、の特大題に「(前略)かくて社大(社会大衆党)、東方(東方会)両党のみの合同では数も少く従つて革新々党としての意義も薄らぐといふので麻生、亀井の両氏は最近になつて又々新党結成を目論み桜田俱樂部なるものを作り政党占拠事件の立役者中溝多摩吉、山元亀次郎の諸氏と結んで秋山氏引っぱり出しを策する一方二月三日、近衛公を荻窪の私邸に訪問し政友会の一部をも加へた広汎な合同新党を画策した云々」以下略。

昭和十三年十一月十三日大阪毎日新聞サンデー毎日には、特大題で掲げ文中曰く「(前略)さて近衛首相の企図する国民再組織運動が突如として表面化したのは、去る十月十一日の末次(信正)、塩野(秀彦)、木戸(幸一)三相会議であつた。(中略)実はその前夜の十日午後六時から行はれた虎の門の霞山会館における会合に対する世間のデマを封殺するにあつた。この会合は首相夫妻(「」)木戸厚相、松岡洋右氏、秋山定輔氏、秋田清氏、それに社大の麻生久、亀井貫一郎の両氏、秋山氏に縁故の深い宮崎龍介氏、山元亀次郎氏、日本革新党の佐々井一晁氏、更に近衛内閣組閣本部で活躍した後藤隆之助氏等の四十名で、いはゞ近衛首相の家族的一統と秋山氏の関係門下一統の寄合であつた。」(下略)

其他中央公論、日本評論等殆んど言論界には最近山元君の活躍が私の識る範囲に於ても指を屈する事の出来ない位に多いのも、如何に薩南の大西郷に私淑する山元君が現代及将来の日本の政界に必要な人物であるかは明かである。況んや名門の出でなく学位も金も政党の背景すらもない裸一貫の同君の、この偉大なる歴史的存在に若し更に選挙民にして彼に議員の栄冠を与え政治的舞台を提供したならば、それこそ鬼に金棒である。

大西郷と因縁深い選挙民よ。全国の興味はこの再選挙に於ける彼にかゝつて居る事を御記憶され、当選を希ふ次第である。



『資料目録』No.24。山元の送別会にて。前列中央が山元。写真裏には「昭和十三年十二月六日／於北京 料亭千鳥／山元代議〔ママ〕送別会／後列／向ツテ左ヨリ／一人目、崔芳庭、軍長、総司令官／二人目、李鳳鳴、陸軍中将／三人目、陳宦、四川督軍／五人目、蔣雁行、綏遠參謀総長／六人目、秋山鉉業株式会社社長／七人目、王飛鵬中国人民防共自治会長／前列／左四人目 馬驥材、山西師部參謀長、師長／左三人目 程希賢、天津公安局長／右二人目 道学方、陸軍中将／中央 山元亀次郎／右三人目 吳宗周、河南省秘書」とある。赤松の推薦文〔②－1 記事3〕にある訪中時の写真。

② 一九四二年の選挙広報紙『資料目録』No.3

山元は、一九四一年七月に衆議院議員選挙法違反事件で代議士の資格を失った。その後、一九四二年四月の翼賛選挙に再び立候補する。一九四〇年のときと同じく一九四二年の選挙広報紙にも発行年、発行場所は明記されていないが、選挙区で配布されたものと考えられる。一面の半分以上を使って、「私の主張した通り政友会、民政党〔一〕社会大衆党の老廃既成政党は解党した。次は強力な国民政治力を結集し、大東亜戦必勝の挙国党へ。翼賛議会確立へ」「亜細亜十億の父として日本民族興隆の鍵はこの大東亜戦にあり。現代国民は二千六百年祖先の血を継承し新興亜細亜の再建に当れ」「貴下の一票は挙げて山元亀次郎へ」と大書されている。今回の推薦者は、公爵一条実孝、男爵伊藤文吉、陸軍中将菊池武夫、小森雄介、大川周明、秋山定輔である。選挙広報紙において重要だと思われる選挙法違反事件についての山元の主張と政見〔記事一〕、山元自身が書いた略歴〔記事二〕をそれぞれ以下で掲載した。

〔記事 一〕

再び信任を問ふ弁

〓〓二十数年間終始一貫正義の味方〓〓

衆議院議員候補者 前代議士 山元亀次郎

謹んで護国の神となり給ひし勇士の英霊に哀悼の意を表し、はるか大東亜戦線にて我等の身代りとなり艱難辛苦と戦ふ皇軍将兵に衷心より感謝申上げると共に、その武運長久を祈る者であります。

私も又銃後に於て将兵の心を心とし、長期戦の国家体制確立の爲め挺身することを誓ふ。

元陸軍歩兵一等兵 山元亀次郎

(一)

私は一昨年の再選挙に出馬し約一万五千余の飛躍的票数を以て当選しました。これ山元個人の当選ではなく大島肝属郡大衆の勝利であり当選であります。勝てば官軍、敗くれば賊です。近世の英雄大西郷も鳥羽伏見で勝つて維新の三傑となり、十年戦争で敗くれば賊となつたのであります。大東亜戦も勝てば大亜細亜の盟主として世界に君臨するが、万一敗れば百年の民族的苦悶の行を続けねばなりません。戦ひは勝てば正義と化す。

第三区大衆が私を勝たしたのは二十数年間、権力金力に屈せず、全世界が仰ぎ観て信服する皇道日本建設の爲め、正義の爲め大衆の爲め戦ひ來つた私の歴史を勝たしたと確信して居ます。私の愛国的情熱の勝利でありました。謹んで感謝申し上げると共に、この政戦に更に御願ひ申します。

(二)

選挙の報告、議会の報告は、私の平常考へて居る百分の一も実行して居りませぬ。選挙報告と御礼は法律の禁止する所であるから別として、議会報告は部分的には演説や新聞紙上を以て責任を果して居るとは云ふものゝ、第三区全部には未だ行き届いて居りません。誠に相済まんと思つて居ます。

当選以來この二ヶ年間の私の周囲には公私共所謂内憂外患の不幸続きでありました。天の試練として益々身心の修養を行ひ難局突破に全身の血は躍動して居ますが、天命には従はねばなりません。老父母は私の当選を喜び有権者に感謝しながら世を去りました。特に老父は当選後十六日目です。私はこの感激を永久に五臓六腑に銘じ何一つ思ひ残す事なく、今後一路御奉公するだけであります。

それから例の選挙違反事件であります。私は過去、三回共何等違反を起して居りません。選挙肅正、理想選挙は実に二十数年来私の選挙歴史の全部であります。然るに不幸にして過般の再選挙に違反事件が発生し終いに私は口致しました。選挙費全額二千百円その中私が十円を南国防新聞の購読料として、支払ひし一点と選挙事務員西が選挙委員秋山に十円貸したが、秋山が精算して□ないから報酬で、それを私が識つて居た、との以上二点が、大審院に於ける私に直接関

する違反事件の法律的根拠であります。次に選挙事務長と、選挙委員肥後、秋山の関係を、私が了解して居た、との問題であります。〔数字破損〕新聞以外は私の関知する所ではない、と終始一貫したが、司法当局は認めず罰金三百円に処し私は議会から幽霊の如く消えたのです。

(三)

これが法律なるものであります。過去の議員が議会で協賛した選挙法の光景であります。

さすが第三区の事情を最も識る水町裁判長は鹿児島地方裁判所で無罪の判決を降しましたが、検事控訴あり、長崎で罰金三百円に判決、不服として上告し、私はその間南支仏印方面の旅行に出かけ帰京早々、大審院は一度破棄してから控訴院と同様の判決になったのであります。この罰金は今回の特別特赦で消えました。天恩に感泣して居ます。

元来「一〇行分空白」私は大楠公の非理法權天と大西郷の敬天愛人を人生と国家の指針とする者で、帰する処天意が最期の正義であり、敬天愛人が政治の要諦と確信し行動して居ます。併し法は法でありますから、再び有権者に御迷惑をかけない決心でこの政戦に臨んで居ります。人事を尽して天命を俟つ。神でない人間の□□行動□□如何に注意しても罰せんとせば選挙法は罰するが如く複雑難解であります。ここに私の不注意の為め心ならずも違反事件を起した事を謹んで御詫び申す者であります。同時に山元亀次郎を責むる前に寧ろ御同情願ひ度いのであります。十年戦争のとき、大西郷曰く『何事も天でござす』と。併し選挙粛正がここまで徹底せば、私の本旨に一致し寧ろ喜びに堪えません。高価な犠牲は甘んじて受けます。

(四)

議会に於ける私の生活は正味三ヶ月、議員任期僅か一年半に足らない短期間であつたが、私の主張した政策の実現には献身的に動いて来ました。議会では予算委員（一）決算委員、陸海軍刑法改正委員、軍法会議改正委員其他数種の委員として重要質問をなし、その間ラジオで全国に放送されたものもあり、斉藤問題で米内総理大臣に対する質問戦の如きは、東京朝日新聞をして最近最も真剣な質問で、この真剣味があつたならば、議会も信用を失墜しなかつたであらうとまで

報導さして居るのであります。同志と共に議員の大多数を占むる聖戦貫徹議員同盟、或は新体制促進同志会の幹部として、政友会、民政党、社会大衆党の解党を断行させ、表面に裏面に兎に角有権者に誓つた政策の実現に微力ながら全力を集中して来て居ます。

其他重要な政見としてこの前に誓つた十大政綱の中大東亜主義の実現は大東亜戦となつて現れ新興国家群と軍事同盟の締結は、日独伊の軍事同盟となりました。何れ一般政見は果の公報に譲るとして私の政見が国家の進運に寄与する実際政策であり、又それを実行せずんば日本民族の大使命は貫徹出来ない確信の上に立ち、断じて空論でなかつた事を証拠立てて居るではありませんか。世の中は私が二十年來の主張した通り進んで居ります。政治家の要素は第一に識見であります。先を識る事であります。先が真暗では国家を谷底に陥し入れます。これは政治家として不忠の極です。第二に情熱であります。老廃者や君子の如く八方美人の無情熱では、非常時の日本は救えない。平和時代には伶俐巧者が成功します。米英の自由主義的虚偽な平和社会にはこの部類の人間が多い。国家破滅の元兇はこれです。千万人の敵と雖も断乎として進む情熱は政治家の要素であります。大西郷の如きは正にこれです。第三は犠牲であります。犠牲は勝利の前衛であり犠牲なき所に勝利なし。戦争も犠牲を要求し、政治家も国家の爲め大衆の爲め犠牲の精神が必要であります。今後の大東亜建設戦は愈々これを要求して来ました。私はこの三要素を以て自己修養に資し翼賛政治確立に突進する覚悟で立ちました。天は国家の進む可き天地の大道を暗示して呉れます。神に通ずる者のみこの大道を識る。神に通ぜずんば人間の道は解りませぬ。

(五)

今回の選挙は全国共乱立の情勢にあります。犠牲候補もあらう。売名候補もあらう。時局認識とか、新人とか云ふても自分で自分の事すら解らない人間の常事であります。況んや他人の事です。然らば帰する処何か。候補者の政治的歴史を以て律し、これを判断の基礎とするより外はありません。単なる精神論なら神主で充分です。パンだけの唯物論も人間と動物を同一視する錯覚の現れであります。国体の本義に基く大義名分を絶対保持し、日本民族の世界的使命を自覚

し、これと表裏一体たる国民大衆に生活的希望を与ふる政治でなければならぬ。

私は以上の信念を以て各位に再び信任を問ふ次第であります。何人の看板推薦者よりも私は只有権者各位の推薦のみ眞の推薦として心から喜び光榮とする者であります。

〔記事 二〕

候補者略歴

我を語る

私は今回で五回目の立候補です。従つて今更略歴でもないと思ひます。三回落選し四回目で当選、愈々五回目の出陣になりました。有権者各位は悪も善も識り抜いて居られると思ふから一部だけ申し上げます。

明治廿七年五月十二日大島郡西古見に生れ、苦学して大阪桃山中学を卒業、その年入営し在営二ヶ年歩兵一等兵になり退營、日本大学に一時法律を学び、その間各大学雄弁会を結集して全国学生同盟会を作りその中心となつて大正八年当時の原内閣に普通選挙実行を迫り、退学して日本労働党を組織、その主宰者として愛国運動の先陣となり、大衆の爲め闘ふ。その綱領は「我党は皇室の尊嚴を一層尊からしめ君民間を疎隔する特權階級を廢除す」とかゝつて居ます。そのとき二、二六事件の首謀者となり死刑に処せられたる北一輝、五、一五事件の首謀者大川周明博士等と老社会を組織し、〔一〕かくて社会民衆党、日本国家社会党の中央執行委員ともなり、無産政党、政友、民政党を解党、大東亜戦争の爲め国民政治力口結集する今回の強力政党に進展する時運構成に微力を捧げて來ました。私の政治活動は愈々これからです。私の苦難もこれからです。



③写真

山元亀次郎関係資料の半分を占めているのが写真である。戦前の写真より戦後の写真の方が多く残っている。戦前の写真では、既に②で掲載した「山元亀次郎中国旅行歓迎会」や中国旅行時の写真などのほかに、一九三〇年の遊説時に尾崎行雄を大島に招いたときの写真が何枚かある。そのうちの一枚が上のものである（『資料目録』No.40 前列右から山元、尾崎、なお写真の周囲の状態が悪いので中央部のみ掲載）。

戦後の写真のなかでは、西古見会や同窓会で撮影したもの、また家族写真などプライベートなものが多く、政治運動や社会運動に関する写真はそれほど多くはない。戦後に山元は日本社会党左派から立候補しているが、落選に終わった。戦後の山元と中央政界との関係は戦前ほど深くなくなっていたと考えられる。

ただ、戦前の無産政党関係者たちと戦後も交友は続いていた。とくに故秋山定輔七回忌法要後の写真（村松梢風³²、原田政治³³、内藤民治³⁴、橋本徹馬³⁵ら）、山川均を囲んで撮った写真、山元とともに社会民衆党から国家社会主義運動へと移った赤松克麿、小池四郎、陶山篤太郎の追悼会に出席したときの写真、「北一輝の会」（北吟吉³⁶主催）に参席したときの写真はいずれも貴重であり、戦後の山元の思想と軌跡をみるうえでも興味深いので、ここに掲載した。



『資料目録』No.39。1957年の故秋山定輔 7 回忌法要後に山田耕作宅で。写真裏には「於山田耕作宅／向テ左カラ／富元〔富本岩雄〕／橋本徹馬〔紫雲山地蔵寺住職〕／津崎尚武／秋山〔貞子〕未亡人／秋山〔定輔〕先生写真／秋山一〔秋山定輔子息〕／村松梢風〔小説家〕／宮崎龍介／内藤夫人／内藤民治／後列 山元亀次郎／原田政治／秋山写真師〔牧村真吉〕」とある。後列左が山元。これと同じ写真が『秋山定輔伝』第3巻巻頭に収録されている。ただし同書では「内藤夫人」が「同〔宮崎龍介〕夫人」とある。



『資料目録』No.28。鈴木茂三郎と。写真裏に「於永楽クラブ／立てるは／鈴木茂三郎／左山元亀次郎／〔昭和〕32.4.23」とある。鈴木は当時日本社会党委員長。



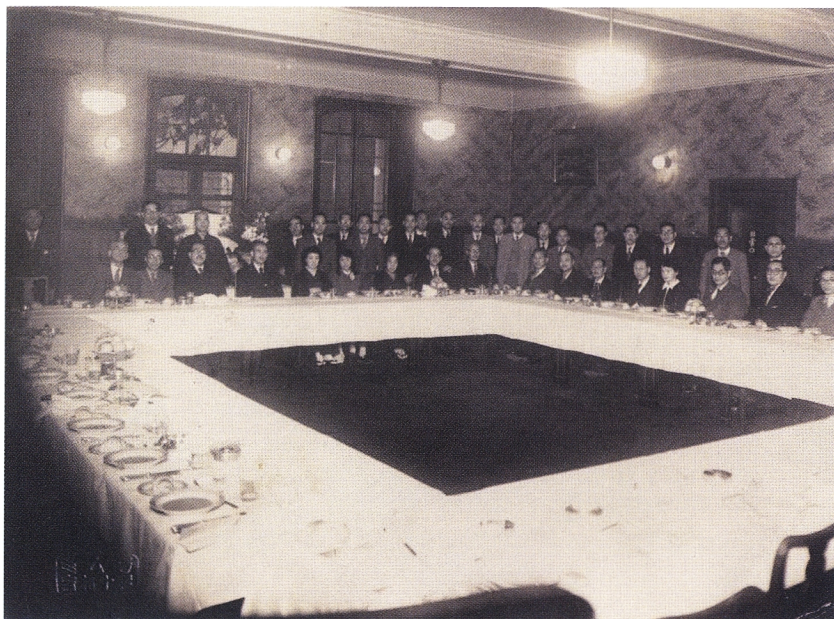
『資料目録』NO.55 山川均（前列右から4人目）を囲んで。撮影時期は不明。
 山元は後列右端。写真裏には「右から／前参議院議員 木村禧八郎〔日本社会党、のち労働者農民党結成〕／代議士 北昉吉〔北一輝の弟、戦後は日本自由党、日本民主党、自由民主党〕／参議院議員 岡田宗治〔日本社会党〕／山川均 評論家／代議士 帆足計〔日本社会党〕／前代議士 黒田寿夫〔寿男、日本社会党、のち労働者農民党結成〕／山田耕作 音楽家／内藤民治 日ソ相扶会会長／元代議士 馬場秀夫／外実業家／市川憲口」とある。



『資料目録』No.31。故赤松克麿追悼会にて。中央が山元。写真裏には「木曜／山元亀次郎／故／赤松克麿君／於追悼会／山元様」とある。開催日時は不明。赤松は1955年12月13日に亡くなった。山元は赤松の通夜に参加したほか、翌年2月15日に開かれた「赤松克麿を偲ぶ会」にも出席した（「赤松克麿を偲ぶ会」など『東洋評論』1956年3月号）。



『資料目録』No.30。石橋湛山首相歓迎会にて。前中央が山元。写真裏には「永楽クラブにて石橋首相歓迎会／立つて居るのは／石田〔博英〕官房長官／左中川〔一郎〕会長／宮沢〔胤勇〕運輸大臣／右堤〔康次郎〕前衆議院議長／前、山元亀次郎／〔昭和〕32.1.16」とある。



『資料目録』No.41。小池四郎・陶山篤太郎追悼会。撮影時期は不明。写真裏には「小池四郎／陶山徳太郎〔篤太郎〕／追悼紀念／西尾末広〔日本社会党〕／平野力三〔日本社会党〕／三輪寿壮〔日本社会党〕其他」とある。顔が小さくて山元を特定できず。戦前の無産政党関係者で小池、陶山と交友があった人物が集ったものと思われる。小池も陶山も山元と同じく、1930年代初頭に社会民衆党から日本国家社会党へ移った。小池は1946年3月11日に、陶山は1941年9月28日に亡くなった。



『資料目録』No.37。北一輝の会にて。写真裏には「於目黒不動／北一輝の会／
 亜細同志会〔亜細亜同志会〕／主催」とある。前列右端が山元。『日本近現代人
 名辞典』（2001年7月、吉川弘文館）の「北吟吉」（高橋正衛執筆）の項目には、
 北吟吉が1958年10月に北一輝門下生らの集まりであるアジア同志会の顧問と
 なったことが記されている。

付記

資料はいずれも石川麗子氏所蔵。聞き取り調査及び本稿に載録のご許可をいただいたことをこの場を借りて厚くお礼申し上げます。なお、本研究は、科学研究費補助金（若手研究B）による成果である。

註

「当時の普通選挙運動における学生同盟会の位置は松尾尊允『普通選挙制度成立史の研究』（一九八九年七月、岩波書店）一四五頁を参照。学生同盟会関係者の回想録としては小浜喜一・内藤真作編『内藤隆の思想』（一九八四年七月、内藤家）がある。引用者による註、省略、改行は「」、「」で表記した。旧字体は原則として新字体に直し、歴史的仮名遣いはそのまま表記した。資料の破損などで判読不可の箇所は□で表記した。

① 日本労働党の結成過程は拙稿博士論文『戦間期日本社会運動試論』第四章を参照。

② JACAR（アジア歴史資料センター）RefB3040726800「宣伝関係雑件／囑託及補助金支給宣伝者其他宣伝費支出関係／本邦人ノ部 第三卷一」、山本亀次郎（外務省外交史料館）。「山本」はヤマ。

③ 鹿児島県『大阪朝日新聞』一九二八年二月二十四日付夕刊。

④ 鹿児島県『大阪朝日新聞』一九三〇年二月二十四日付臨時夕刊。「鹿児島県」『大阪朝日新聞』一九三二年二月二三日付朝刊。

⑤ 赤松については「赤松克麿略歴」『東洋評論』一九五六年三月一日、東洋評論社を参照。同号は赤松の追悼号であり、山元も「赤松克麿君を憶う」を寄せた。同稿では、日本国家社会党結成過程で大川周明を仲介役として陸軍と社会民衆党の関係が回想されて興味深い。

⑥ 「中央執行委員」『東京朝日新聞』一九三二年五月三〇日付朝刊。この頃の国家社会主義勢力の再編については田中真人「満州事变」と国家社会主義（渡部徹・飛鳥井雅道編『日本社会主義運動史論』一九七三年八月 三一書房）を参照。

⑦ 「鹿児島再選挙山元氏当選」『読売新聞』一九四〇年二月一三日付朝刊。「山元氏（中新）当選 鹿児島県第三区の再選挙」『東京朝日新聞』一九四〇年二月一三日付朝刊。「山元氏第一俱に入会」『東京朝日新聞』一九四〇年二月二二日付朝刊。

⑧ 秋山と山元がいつ出会ったかはわからないが、一九二二年の秋山の年賀状名簿に山元の名がある（桜田俱樂部編『秋山定輔伝』第

二卷、一七九頁、一九七九年一〇月、桜田俱樂部。また秋山一は新年の際秋山邸に来る「内輪の客」の一人に山元の名をあげている(秋山一「父・秋山定輔」続「桜田俱樂部編」秋山定輔伝)第一巻、一九七七年六月、桜田俱樂部。

③「聖戦貫徹連盟結成か」反民政陣、共同戦線へ『東京朝日新聞』一九四〇年三月六日付朝刊。「新政治体制研究会 各派有志準備会開く」『東京朝日新聞』一九四〇年七月二日付夕刊。「新体制研究会創立 特別委員十五名を決定」『東京朝日新聞』一九四〇年七月二日付朝刊。「新体制委員中島総裁訪問」『読売新聞』一九四〇年七月二日付夕刊。「新体制実行委員中島総裁を訪問」『東京朝日新聞』一九四〇年七月二日付夕刊。

④「促進同志会総会」『東京朝日新聞』一九四〇年八月二三日付朝刊。「山元、小田両氏除名」『読売新聞』一九四〇年八月二四日付朝刊。「促進同志会二氏を除名」『東京朝日新聞』一九四〇年八月二四日付朝刊。

⑤「山元代議士に無罪の言渡し」『東京朝日新聞』一九四〇年十一月二日付朝刊。「山元亀次郎代議士失格」『読売新聞』一九四一年七月二五日付朝刊。「山元代議士失格」『東京朝日新聞』一九四〇年七月二五日付朝刊。

⑥「衆議院議員総選挙大観」『東京朝日新聞』一九四二年五月三日付朝刊。

⑦「左社三名追加」『読売新聞』一九五二年九月五日付朝刊。「全候補者確定得票数」『朝日新聞』一九五二年一〇月三日付朝刊。

⑧「選挙やり直し奄美大島法定得票者なし」『朝日新聞』一九五四年二月一七日付朝刊。「五候補で争う」『朝日新聞』一九五四年四月一六日付朝刊。

⑨石川麗子氏の御教示による。

⑩同書には尾崎行雄と今井嘉幸の序文がある。表紙中央には「普通選挙祝賀記念」とあり、選挙立候補にあたって自らの名前を宣傳する意図があったと考えられる。内容はこれまでの演説時の草稿や論文をまとめたものである。目次は「一 普通選挙祝賀の理由」「二 私の愛国の態度の宣言」「三 新大和魂の再建と日本民族の使命」「四 日本個人主義経済崩壊の諸相」「五 理論的方面より觀察せる資本家経済の運命」「六 国際経済の圧迫と不景気の真相」「七 人道的実証的環境より觀たる資本家経済の将来」「八 教育の民衆化」「九 宗教物質化の打開」「一〇 国家統制の諸機關と価値」「一一 普通選挙と議會」「一二 我国自由民権の三大変遷相」「一三 既成政党の将来」「一四 滅び行く政友本党と三洲人の悲哀」「一五 政友本党の普通選挙反対論を駁す」「一六 樺代議士の普通選挙反対論を一撃す」「一七 吾人の目標」である。このあと付録として日本労働党、全国学生同盟会の資料がある。なお、山元による「自序」に彼のこれまでの軌跡を振り返った文章があるので引用しておく。「今年三十三歳、この間、十四歳に古仁屋高等小学三年を修了し、熊本に出て後半歳程中等学校に学んだが、学資欠乏の爲め勇敢に退学して長崎に出奔した。長崎では人間苦の一人分を体験する光栄に浴した。初め、長崎と島原間定期船百五十噸の汽船ボーイとして雇はれた。後又約半歳して今度は旅館の小僧になった。後門司に転じて同じく旅館の小僧や、酒屋の配達夫に榮転した。その転々生活の間に三度の飯の恩恵に接せざる事、何十回あるを知らない。十七歳の時、脚氣で掃省し、約一ケ年間癯削りに努力し得たる賃銀拾數金を以て、苦学の爲め大阪に出で、此で帝國興信所及び報知新聞の配達夫となり、桃山中学四年に編入合格し、大正四年卒業。同年四月、帰省中、徴兵を受け、歩兵甲種に合格した。金百円の資本を出すなら少尉様か、間違つても軍曹には榮進出来るが、私にはそれは本意ではない。一

般兵と同様普通兵として台湾連隊に入営し、無事帰休した。尤も上等兵候補には首位で推薦され、大正拾年予備演習の時も上等兵に榮進さす可く交渉されたが雄々しく拒絶した。理由は別にない。私には別に名譽とも何とも思はなかつたからである。国民としての義務を果せば、それ以上望みはないからである。／大正六年退營し、七年二月上京日本大学に入学した。それからが、私の社会歴史が開始される。それは略して置く(二頁三頁)、『新日本の活路と原動力』は石川麗子氏から複写したものを送つていただいた。

※ 新人会、建設者同盟の記録については以下の文献がまとまつている。石堂清倫・堅山利忠編『東京帝大新入会の記録』(一九七六年六月、経済往来社)。建設者同盟史刊行委員会『早稲田大学建設者同盟の歴史 大正期のヴ・ナロード運動』(一九七九年九月、日本社会党中央本部機関紙局)、『農民組合史刊行会資料(八)座談会記録「日農創立前後を語る」』建設者同盟から日農関東同盟へ(一九五六年一月、農民組合史刊行会)。

※ 秋田清については吉田弘苗編『秋田清』(一九六九年一月、秋田清伝記刊行会)を参照。秋田は秋山の腹心であり、秋田と秋山の新体制運動について同書六二九～六四二頁に記述がある。

※ 田中国重は陸軍大将で明倫会会長。彼及び明倫会については明倫会編『明倫会会史』(一九四二年五月、明倫会々史編纂所)を参照。

※ 小森雄介については「小森雄介」(御厨貴編『正伝後藤新平・別巻 後藤新平大全』二〇〇七年六月、藤原書店)を参照。なお、先日小森雄介の孫にあたる小森彰子氏に聞き取り調査をさせていただいたので、後日新資料とともに改めて発表したい。

※ 佐々井一晁は当時日本革新党の党首で、一九三二年秋頃から秋山のもとに入入りしていた(佐々井一晁「秋山定輔先生を偲ぶ」前掲『秋山定輔伝』第二巻)。日本革新党については田中真人「日中戦争下の国家主義団体―日本革新党の分析―」(『社会科学』一九七七年一月二五日、同志社大学人文科学研究所)を参照。

※ 宮崎龍介もこの時期秋山定輔のもとで中国国民党主席蒋介石との交渉を試みていた(桜田俱樂部編『秋山定輔伝』第三巻、七六～八一頁、一九八二年三月、桜田俱樂部)。

※ 実川時治郎は政界浪人で、この頃秋山邸に入入りしていた常連の一人だった。追悼集があるが未見。

※ この頃の中溝多摩吉の動きは青木保三『七十年を顧りみて』(一九七〇年九月、青木宏之)の「防共護国団の巻」が詳しい。

※ 一条実孝は頭山満、山本英輔海軍中将らと一九三七年一月に「全国民に告ぐ」を発表して「強力政党の新組織」を訴えた。なお、『山元亀次郎関係資料』には、山本から山元に宛てた書簡(一九三六年四月一〇日付)が一通だけ残されているので、交流があったものと思われる(『資料目録』No.13)。

※ 『山元亀次郎関係文書』には伊藤文吉から久原房之助に宛てた封筒があるが中身はない(『資料目録』No.12)。

※ 大川周明と山元が老社会を組織したわけではないが、老社会が山元の活動にとってひとつの転機となったことは間違いない。山元亀次郎「ありし日の島中さん」『あゝ島中雄三君』一九四二年九月、中央公論社)を参照。

※ 村松梢風は小説家。秋山定輔との関係が深く、村松喬「二代記」(村松喬編『梢風記』一九七〇年四月、村松喬)にも秋山との関

係が回想されているほか、秋山の口述筆記を村松梢風がまとめた『秋山定輔を語る』（一九三八年一月、大日本雄弁会講談社）、同『秋山定輔は語る 金・恋・仏』（一九四八年二月、関書院）がある。

※ 原田政治については伊藤隆「素顔の北一輝と二・二六——原田政治氏に聞く」（『中央公論』一九七五年二月一日、中央公論社）を参照。同稿によれば、原田は「浪人」であり、秋山定輔と交わり、小泉策太郎、横田千之助の秘書的な役割や北一輝の資金係りも務めたという。

※ 内藤民治については不明な点が多いが以下の文献を参照。内藤民治「忘れられた人物——内藤民治回想録（上） 日ソ関係の裏面史」（『論争』一九六二年二月一日、論争社。同「忘れられた人物——内藤民治回想録（下） 日ソ関係の裏面史」（『論争』一九六三年一月一日、論争社。岩井忠熊「解説——『中外』と内藤民治」（『中外』解説・総目次・索引」（一九八八年二月、不二出版）。

※ 橋本徹馬については橋本徹馬『自叙伝』（一九九六年五月、紫雲荘）を参照。

※ 北吟吉については稲辺小二郎編『追想記』（一九六三年二月、北吟吉三周忌法要会）、稲辺小二郎『一輝と吟吉 北兄弟の相剋』（二〇〇二年六月、新潟日報事業社）をそれぞれ参照。